



緩和ケア病棟について（平成16年2月定例会）

わが国で年間30万人、県内においては、4,120の方ががんで亡くなっています。

私の夫はがんの手術後、一度は元気になりましたものの進行の速さには勝てず6ヶ月の闘病の末亡くなりました。しかし、その間は山口県立中央病院の先生方の手厚い治療やスタッフの皆様方の温かい看護のおかげで充実した日々を過ごすことができました。54年の人生の最期の瞬間は、家族の見守る中、主治医の先生にさっと腕を伸ばし「お世話になりました」と握手をしながらきちんとお礼を言い、私の腕の中で「ありがとう」の言葉を遺し旅立ちました。

「いい人生を送れた」と感謝しながら、また最期の瞬間まで尊厳を持って生き抜いて逝った夫の人生の閉じ方は、実に見事であったと思いますし、全てのがん患者さんにこのような最期を送らせてあげたいと思っていた折、「県東部に緩和ケア病棟を設立してほしい」と運動を立ち上げられた「周南いのちを考える会」の人たちと出会いました。

県立中央病院での夫の入院生活は、まさにその会の人たちが求めているホスピスの心そのものだと知り、この運動に関わるようになりました。

ホスピス、緩和ケア病棟は県内には現在3カ所ありますが、残念ながら県東部にはまだありません。同時に、緩和ケア病棟という入院施設と共に、自宅療養を望む患者さんへの支援として訪問看護ステーションの整備の充実も必要です。

看護師の育成と、緩和ケア病棟設置への取り組みに対する、県の御所見をお伺いいたします。

【健康福祉部長答弁】

緩和ケアを実施するに当たりましては、がん医療の高度化・専門化に対応できる能力を備えた看護師を養成する必要がありますことから、今年度、新たに、がんについての専門的看護ケア研修に取り組んでいるところです。

訪問看護ステーションの看護師には、専門研修の実施に向けて、関係医療機関、団体等と検討していくこととしております。緩和ケア病棟の整備の促進や看護師の育成等、緩和ケアの充実に鋭意努めてまいります。